Moon River
ムーン・リバー
Nicki Parrott
ニッキ・パロット

1. ムーン・リバー
Moon River《H. Mancini - J. Mercer》(3:57)
2. イズ・ユー・イズ・オア・イズ・ユー・エイント・マイ・ベイビー
Is You Is Or Is You Ain't My Baby?《L. Jordan - B. Austin》(4:02)
3. セイ・イット・イズント・ソー
Say It Isn't So《D, Raye, G. DePaul》(4:33)
4. ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ
You'd Be So Nice To Come Home To《C. Porter》(3:35)
5. 恋のチャンス
Takin' A Chance On Love《V. Duke - J. LaTouche, T. Fetter》(4:51)
6. アイ・ドント・ノウ・イナフ・アバウト・ユー
I Don't Know Enough About You《P. Lee - D. Barbour》(4:45)
7.メイキン・ウーピー
Makin' Whoopee《W. Donaldson - G. Kahn》(3:59)
8. クライ・ミー・ア・リバー
Cry Me A River《A. Hamilton》(5:08)
9. 縁は異なもの
What A Difference A Day Made《M. Grever - S. Adams》(3:42)
10. ベサメ・ムーチョ
Besame Mucho《C. Velazquez - S. Skylar》(4:36)
11. 捧ぐるは愛のみ
I Can't Give You Anything But Love《J. McHugh - D. Fields》(4:18)
12. ニッキのブルース
Nicki's Blues《N. Parrott》(2:50)
13.ザ・モア・アイ・シー・ユー
The More I See You《H. Warren - M. Gordon》(5:20)

ニッキ・パロット Nicki Parrott《vocal & bass》
ハリー・アレン Harry Allen《tenor sax》
ジョン・ディ・マルティーノ John Di Martino《piano》
ポール・マイヤーズ Paul Myers《guitar》
ビリー・ドラモンド Billy Drummond《drums》

録音：2007年6月7、8日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

Ⓟ Ⓒ 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on June 7&8, 2007
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound : Tetsuo Hara
Front Cover and Artist Photos by Mary Jane Photography
Designed by Taz

ブロンドの長い髪をなびかせながら、ウッド・ベースを弾き、マイク・スタンドでジャズを歌う美女――それが、ニッキ・パロット。ジャズの世界をあでやかに彩る美人シンガーはあまた存在したが、美人ベーシストが歌う光景はまれではないだろうか。ちょっとすぐには信じがたいようなドリーミーな存在のジャズ・シンガー＆モダン・ベーシストの登場である。ニッキはルーファス・リードからベースを学んだ正統派のジャズ・ベーシストであり、艶やかに甘いシルキー・ボイスで歌う。歌手のタイプとしては、リラックスした歌い方でセクシーに歌う彼女は、ジャズ界のセックス・シンボル、ジュリー・ロンドンを思わせるところがあり、さしずめ、“ベースのジュリー・ロンドン”といったところだろうか。　そんな得がたい魅力をふりまいてくれる“シンガー・ベーシスト”、ニッキ・パロットの記念すべきファースト・アルバム『ムーン・リバー』が、これである。ニッキはオーストラリア出身で、ニューヨーク在住。ヴィーナスレコードの原哲夫プロデューサーは、レイチェルZのピアノ・トリオ作品『愛は面影の中に』を録音した時、参加メンバーのニッキからデモ・テープを受け取った。それでニッキが歌っているのを聴いて魅了させられたそうだ。伝説のジャズ・ギタリスト、レス・ポールは毎週月曜日にジャズ・クラブ“イリディウム”でライブ・ショーを行なっているが、2000年6月以来ニッキはそのレス・ポールのバンド・メンバーであり、そのバンドで彼女は歌も歌っている。その映像は、インターネットのYouTubeやMySpaceで見ることができるので、検索キーワードにNicki Parrottと入力してぜひ見てください。レス・ポールは現在なんと92歳(！)。　また、ニッキは姉のリサ・パロットと一緒に活動することも多い。リサもジャズ・ミュージシャンで、アルト／バリトン・サックス奏者だ。歌う女性ベーシストもまれだが、バリトン・サックスの女性も少ないだろう。ニッキとリサは2人名義のアルバム『The Awabakal Suite』(2001年)をルーファス・リードのプロデュースで録音している。オーストラリアの原住民アワバカルに捧げる組曲を収録したアルバムだ。ニッキ・パロットは、オーストラリア南東部の湾岸都市ニューカッスル生まれ。4歳の時にピアノを始め、すぐにフルートも演奏するようになる。そのまま両方の楽器を続けたが、15歳の時にベースに転向。アルト・サックスを吹く姉のリサが、彼女のバンドのベースを探していたからだ。姉はピアノとクラリネットを習った後、サックスに転向した。ニッキは高校卒業後、姉を追ってシドニーへ行き、姉妹揃って名門ニュー・サウス・ウェールズ音楽院（通称、シドニー音楽院）でジャズを学ぶ。入学後、ニッキはすぐに有名なピアニスト、マイク・ノックをはじめ、デール・バーロウ、ポール・グラボウスキー、バーニー・マクガン、ジョン・ポシェが組織するテン・パート・インベンションなど、オーストラリアを代表するジャズ・ミュージシャンたちと共演する。来豪したレイ・ブラウン、ジョン・クレイトンからベースを学ぶ機会も得る。92年にはジャズ・アクション・ソサエティの作曲コンペティションで優勝している。　そして、意を決して、ニューヨークへ渡ったのは94年のこと。オーストラリア芸術委員会の助成金を得て、ジャズ教育者としても知られる名ベーシスト、ルーファス・リードから学ぶことが渡米の目的だった。姉のリサもその前年、同じく政府の助成金を得て、スティーブ・コールマンから学ぶためニューヨークに来ていた。それ以降、ニッキはニューヨークで音楽活動をするようになった。これまで彼女が共演したミュージシャンは、クラーク・テリー、ミシェル・ルグラン、ビリー・テイラー、ディック・ハイマン、グレッグ・オズビー、ジョン・ピザレリ、ホセ・フェリシアーノ、マリーナ・ショウなど多数。また、デレク・スミス、ジョン・トロペイ、ケニー＆ダバーン＆ケン・ペプロウスキー、デビッド・クラカウアーなどのアルバムの録音に参加している。ニッキは着実に腕を磨き、レス・ポールの元ではジャズ・シンガーとしてもフィーチャーされているように歌う機会も増えてきたようだ。　アルバム『ムーン・リバー』は、そんなアコースティック・ジャズのベーシスト、ニッキのボーカルをフィーチャーした彼女のジャズ・シンガーとしてのデビュー作でもある。ニッキのボーカル・スタイルはリラックスした自然体のもの。ジャズ・ボーカルに対して肩肘を張らず、先入観を持たずにジャズ、そして音楽に向かう誠実な人柄を思わせる。大人の女性の色香やジャジーなナイト・ムードは、自然と出てくるのだろう。何よりも、しっとりとした情感、おもむきがいい。

アルバム『ムーン・リバー』のレコーディングは、ピアノのジョン・ディ・マルティーノ、ギターのポール・マイヤーズ、ドラムのビリー・ドラモンドによるピアノ・トリオにゲストでテナー・サックスのハリー・アレンが加わって2007年6月に行なわれた。ジョン・ディ・マルティーノは、ヴィーナスのロマンティック・ジャズ・トリオの諸作やオーストリアの美人ジャズ・シンガー、シモーネのアルバムでおなじみの存在。ピアニストとして優れているばかりか、編曲者としても素晴らしい才能を発揮している。ギターのポール・マイヤーズは、「ケニー・バレル以来の最も説得力のあるギタリストのひとり」(NY Times)と称賛される売れっ子ミュージシャン。ドラムのビリー・ドラモンドは約20年来ストレートアヘッド・ジャズのトップ・シーンで活躍する名手。ハリー・アレンは日本ではエリック・アレキサンダーと肩を並べる人気テナー。日本制作のアルバム数の多さが人気ぶりを物語っている。彼らはニックと同じくニューヨークを拠点として活躍中の経験豊かなトップ・ジャズメンであり、ニッキの歌とベースを引き立て、好サポートをしめしている。

1. ムーン・リバー　オードリー・ヘップバーンの映画『ティファニーで朝食を』(1961年)でおなじみの名曲。作曲はヘンリー・マンシーニ、作詞はジョニー・マーサー。劇中、ヘップバーンが窓辺に腰掛けてギターを弾きながらこの曲を歌った場面は、映画史に残る印象的なシーンだ。ニューヨークで活躍する女性のあこがれの象徴のような曲ではないだろうか。ニッキ・パロットは、切なさを誘う歌とイマジナティブなベース・プレイで魅せる。

2. イズ・ユー・イズ・オア・イズ・ユー・エイント・マイ・ベイビー　ジャズ／R＆B系の歌手、バンド・リーダーのルイ・ジョーダンの共作で、彼の歌で1944年にヒットした曲。アンドリュース・シスターズ、ナット・キング・コール、ダイナ・ワシントンらのバージョンも人気がある。また、アメリカのアニメ「トムとジェリー」に使われて人気を得た。ニッキの手にかかるとセクシーなナンバーに生まれ変わる。

3. セイ・イット・イズント・ソー　アービング・バーリンが1932年に作詞作曲、恋の不安を歌ったバラード。ジュリー・ロンドンが大人気アルバム『彼女の名はジュリーVol. 1』で歌っていた。ニッキはさりげない歌い方で惹き付ける。ジョン・ディ・マルティーノのピアノも聴きごたえがある。

4. ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ　“ニューヨークのため息”と呼ばれたヘレン・メリルの十八番曲。映画『サムシング・トゥ・シャウト・アバウト』(1943年)のためにコール・ポーターが作詞作曲した。ニッキはスローでセクシーに歌い、途中からアップテンポに切り変えてスインギーに歌う。

5. 恋のチャンス　恋のチャンス到来に心をときめかせる明るいナンバー。ミュージカル『キャビン・イン・ザ・スカイ』(1940年)のためにバーノン・デュークが作曲、ジョン・ラトゥーシュとテッド・フェッターが作詞した。ニッキは余裕を感じさせる歌いっぷりをみせ、ハリー・アレンが好調なアドリブを聴かせる。

6. アイ・ドント・ノウ・イナフ・アバウト・ユー　歌手のペギー・リーの代表曲で、彼女が作詞、夫のデイブ・バーバーが作曲した。そういえば、2人の娘はNickiという名前だ。ニッキのベース・ソロがフィーチャーされるが、歌いながら弾くよく“歌う”ベース・ラインにも注目。

7. メイキン・ウーピー　浮かれた気分を歌ったハッピー・ソング。ガス・カーンが作曲、ウォルター・ドナルドソンが作詞。1920年代末、最初にボードビリアンのエディ・キャンターがヒットさせた。ここでもニッキは魅力的なベース・パフォーマンスをみせる。

8. クライ・ミー・ア・リバー　ジュリー・ロンドンが大ヒットさせたブルー・バラード。これもジュリーのアルバム『彼女の名はジュリーVol. 1』に収録されている。彼女の友人、アーサー・ハミルトンが作詞作曲した。ニッキの歌もセクシーな魅力があって素晴らしい。ベースを弾きながらこの曲を歌うニッキをライブで見たくなった人は多いのではないだろうか。

9. 縁は異なもの　軽快な調子で歌われ、ベース、ギターのソロが挟まれるこの曲は、“ブルースの女王”ダイナ・ワシントンの代表曲として知られるスタンダード・ソング。メキシコの女性作曲家マリア・グレベールが1934年に作詞作曲、スタンリー・アダムスが英語詞を付けた。

10. ベサメ・ムーチョ　この曲もメキシコの女性作曲家の作品で、コンスエロ・ベラスケスが1941年に作曲したセクシーなボレロ。世界的なスタンダード・ソングになった。セクシーな女性シンガーの定番曲のようなナンバーで、ニッキの歌もうっとりするような魅力がある。

11. 捧ぐるは愛のみ　ジミー・マクヒューの作曲、ドロシー・フィールズの作詞。「お金はなくても、愛はいっぱいある」という大恐慌後の不景気を反映した1928年のラブ・ソング。マクヒューはティファニー宝石店で買い物中のカップルが口にした言葉を聞いて、近くにあったスタインウェイのショールームですぐに書き上げたそうだ。

12. ニッキのブルース　ニッキが作詞、作曲したオリジナル。典型的なブルース・ナンバーで、さりげない歌い方の中にも新鮮なフィーリングがある。

13. ザ・モア・アイ・シー・ユー　「会えば会うほど想いがつのる」という熱烈なラブ・ソング。ミュージカル映画『ダイアモンド・ホースシュー』(1945年)のためにマック・ゴードンが作詞、ハリー・ウォーレンが作曲した。ニッキの魅惑的なボーカルにぴったりのバラードで、マルティーノがここでも素晴らしいピアノを聴かせている。

(高井信成)